

事業の背景・目的

＜背景＞ 琵琶湖および周辺水域の沿岸域には多様な植物群落が発達し、数多くの動植物の生息・生育、成長・繁殖の場となっている。しかし、特定外来生物に指定された抽水植物・オオバナミズキンバイとナガエツルノゲイトウが侵入・繁茂し動植物の生存が脅かされたため、これらの外来植物を緊急駆除で低密度化させ、その状態の継続が求められていた。

＜目的＞ 本事業は、徹底した巡回・監視によりオオバナ・ナガエの低密度状態を持続しつつ、駆除困難箇所における生育抑制策や拡大防止策、新規侵入箇所への早期対応と積極的に進め、必要に応じて事後の侵入防止策を採り、沿岸植生の回復・復元を目指す。

事業の内容

＜巡回・監視・早期駆除＞ 低密度状態を維持するため、広域に渡り徹底して実施。



侵入防止フェンスの設置

＜新規技術の導入＞

駆除困難箇所には生育する群落・個体を枯死させるため、耐久性と遮光率が高い遮光シートを敷設する。マット状に繁茂する大群落の外縁部をロール状に巻いて水中に押さえ込んで枯死させる「淀川方式」を導入する。オオバナ・ナガエが生育するヨシ植栽地をフェンスで包囲し、茎や葉の拡大防止を図る。オオバナ・ナガエの新規に確認された箇所では、早期駆除を実施するとともに、事後は巡回・監視対象に含める。オオバナ・ナガエが生育しない箇所への侵入を防ぐため、フェンスを設置する。

得られた成果

＜低密度化継続＞ 3か年の事業期間中、巡回・監視・早期駆除を徹底することで、低密度状態を維持できた。

＜新規技術導入＞ 2年目の年度末、石組み護岸、砂浜湖岸、ヨシ混生地で遮光シートを敷設。枯死に2シーズン必要で、現在、経過観察中。「淀川方式」を3年目の後半、ヨシ植栽地の内側2箇所と伊庭内湖の計3地域で実施し、枯死の進行を経過観察中。内陸部等でオオバナの新規確認が相次ぎ、早期駆除を徹底し、事後の巡回・監視を実施することで低密度状態（根絶を含む）を維持。早期駆除を行ったビオトープやヨシ植栽地への再侵入を防ぐため、侵入防止フェンスを設置し、非生育状態～低密度状態を維持。

→ これらの対策を実施することで、地域全体として低密度状態を維持し、複数箇所で沿岸植生を回復・復元させることができた。

＜今後の展望＞

引き続き、手を緩めることなく低密度状態を維持するとともに、新たな手法の開発・実装によりさらなる低密度化を目指す。広大な地域で多様な手法を導入したオオバナ・ナガエの生育抑制の事例として、対策手法のマニュアル・手引きを作成する。



遮光シートの敷設：石組み護岸とヨシ混生地



「淀川方式」の施行前（2022/9/6）、第1回作業実施（9/29）、第4回作業完了後（11/24）